

講談 蒯大富演義(上)

丘 引

(訳) 山本秀也

第1回 蟄伏半世ニシテ皇夢ヲ做シ、 謀計一朝、神州ヲ乱ス。

東海誰カ言フ、波ヲ定ムル有ルト、
天風一攪、泛汚多シ、
沉渣^{ひそ}窃カニ喜ブ、浮カブ日ノ有ルヲ、
満目混濁、幾何カ能ハン。

この詩の語らんとする所は、文化大革命の奸佞どもが世を乱し、世間の滓を掻き回したことで、国盗っ人、虫ケラの類と同じであったが、しかし喜ぶべきは、人民が一朝目醒めるや、まさにこれら悪党どもを一網打尽にしたことである、といったところであろうか。今となっては、あの悲劇も過去のものとなり、あまたのろくでなし連中も既に忘れられてしまった。しかしながら、そうしたやからの中にも忘れ難いものが何人かおり、恰好の茶飲み話の種となってくれる。かの蒯大富こそは、まさにその中の一人と言えよう。読者諸兄は、大物の国盗っ人にはすこぶる詳しいだろうが、蒯大富のごとき一学生が、何故に数カ月もの間中国全土を騒がし得たか、にわかには分かりかねることであろう。その次第をお知りになりたければ、以下筆者の述べるところをゆりりとお聴き願いたい。

時は1930年代。上海は外灘^{バンド}あたりにちんぴら女優が一匹、名を藍蘋^{ランピン}といった。もとは山東省諸城県の出で、幼時より家は貧しく、成人してからというものの、広い世間にあって虚栄ばかりを好む身となった。上海の芸能界に足を踏み入れてより後は、その社交手腕にモノを言わせて、二流スターには成り上がっていた。決して、彼女が日和見的に

に共産党に入党して、後に自首し、下獄したことを言いたいのではない。ただ、彼女が8・13事変（第2次上海事変）の後、霧の都・重慶に逃げ出したことを言いたいのである。しかし、当時大スターの坩堝^{るつぽ}であった重慶で、どうして彼女如きが高い地位を得られようか。日がな一日、演ずべき舞台もなく、ただ酒席に侍るばかりであったため、これでさらに映画、演劇関係者からは相手にされなくなっていった。しかしこの女、決して人より一段低い所に甘んじる手合ではなく、今度は西安に行き、演劇家の宋某を訪ねた。

「ねえ、宋さん。ちょっと何とかしてよ。日本人ときたら、人をあちこちに追いやっちまうし、中国人も中国人をそっとしといちゃくれない。どこに行っても、あたしゃ身の置き処がありゃしないのよ。いったい、この世であたしが日の目を見る事なんてあるのかね」

この宋某、実は共産党の地下党员で、藍蘋の哀訴を聞き終えたと、笑って、

「道は一つ」

と言いつつ、北の方を指さした。

「渭河を北に渡るというのは、どうかね」

藍蘋は、ちょっと驚いた。

「陝北へ？」

「共産党は今、広く人材を集めている。陝北へ行けば、君は一躍トップスターだ。陝北は確かに苦しいだろうがね、昔から志を持った者が、何で家を守るだけで一生を終えたりするもんかね」

藍蘋は、ちょっと眉を顰^{しか}めて、しばらく考え込んだが、突然大声で笑い出すと、宋某の肩をポンと叩き、

「宋さん、ありがと」

と言ったのだが、この一言が彼女の40年もの長きに及ぶ、社会を舞台とした女優生活の始まりでもあったのだった。

藍蘋は、陝北に着くや果せる哉、文芸界の大歓迎を受けた。旧知の人々も少なくなく、昔を語り談笑するうち、警戒心も解けていった。歓迎の席上、藍蘋は激昂一番、悲憤慷慨してみせてさらに満座を欺き、心中秘かに笑みを浮かべた。

その後、彼女がどう身を振ったかについては、皆様よくご存知の筈故、ご勘弁願うことにしたい。

当の藍蘋は幸福を感じていたが、ただ惜しむらくは、党内の古参党员たちが、彼女に警戒心を抱いていたことだった。彼らは中国革命の大局的見地から、「江青同志（藍蘋）は、永久的に政治に関与しない」という見方で一致していた。

藍蘋、即ち江青は、こうした古参党员たちの決定に随分と悩まされたが、まだ機が熟していないと見て、ただ韜晦戦術を用いるにとどまり、じっと耐えていた。ところが延安で彼女は一人の旧友に、ぱったりと出遇ったのだった。

この人物、姓を康、名を生と言ひ、彼女とは同郷の間柄であった。この二人、悪人同士意気投合、つるんで悪事を働き、30年後、中国に未曾有の大混乱をもたらすのだが、それは後のお話である。

全国解放後も、江青は何の職務に就いてもいなければ、権力もなかった。彼女自身の言葉を借りるならば、「到る処で、遊軍となる」状態だったのだが、その実、彼女は「到る処」でじっくりと風向きを窺い、その頭角をあらわしていた。政治の舞台は、実にうまくしたもので、上海で江青は偶然の機会から、30年代に同地で知り合った顔なじみ、張春橋に出遇ったのだった。

この張春橋、30年代に上海に粉れ込んで、特務組織に身を投じた。しばらくするとまた革命の戦列にも加わり、解放後は上海市委員会宣伝部長に就くにいたった。20年後、また江青と再会するや、たちまち肝胆相照らすツーカーの仲となった。こ

うして、江青の一座はまたも出来の悪い役者を加えたのである。

話を15年前に戻そう。この年の9月、江青はまた上海に現われ、張春橋をホテルに招き、時候の挨拶なぞ交した後、笑みを浮かべてこう言った。

「春橋、お前さん、今のご時勢をどうぞ覧かえ」

張春橋は、江青が笑みを浮かべつつも、瞳に殺気を含んでいるのをみると、心中鳥肌立つ思いで、

「大変結構ですな」

と答えたのだが、江青はフンと鼻で笑った。

「役人風の紋切り型はおやめ。まさか、主席が文芸界へ宛てた指示を読んでないわけじゃないだろう。今の世の中、結構どころか、ワル共の天下じゃないの。お前さんや、私の出番なんだよ」

張春橋はまだピンと来ない。

「評論を書いて批判をやれとでもいうわけか」

江青は笑いながら、ハンドバッグから一枚のメモを取り出し、張春橋に渡した。

「ここに書いてあるテーマは、康生同志と相談して決めたものよ」

彼がそのメモを拵げると、そこには「『海瑞罷官』を評す」と記されていた。

「呉含を批判して、一体何に……？」

と解せぬ風に尋ねると、江青は、

「項莊剣を舞うも、意は沛公にあり、よ」

と答えた。

「鄧拓をやる気か」

「そんなのは、雑魚よ」

「彭真を？」

江青はそれでもまだ首を横に振った。

張春橋は、冷たい汗が背中を伝うのを止めることが出来ない。と、江青が前に進み出て、彼の手を握り、こう言った。

「何年も待ったのに、まだ鳴かず飛ばずというのなら、私たち、このまま死ぬのを待つだけなんだよ。もうこうなったら、一蓮托生よ」

張春橋は、江青の意図をのみ込んだ。ここでド

ジを踏めば、一生の名折れ。彼の野心を実現するためにも、ここは一つ彼女と組むしかあるまい。そう判断すると、にやりと笑いながら言った。

「よし。私が、論文の構成をやろう。執筆者には、あんたもよく知っている姚文元がいいだろう」

1年後、「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」という論文が『文滙報』紙上に発表されると、まず学界関係者が混乱をきたし、当の呉含もその真意を図りかねていた。毛沢東主席自ら、海瑞精神を賛えよう、と呼びかけているのに、これまた一体何の罪があるというのだ。それに、自分は彭徳懐と一面識もないのに、何でまた「事件を蒸し返した」などと言われるのだろうか。呉含は、毒蛇の牙がまさに自分に向けられていようとは、この時夢想だにできなかった。

江青と同郷の康生は、じわじわと陰謀を巡らせながら、それでいて表情一つ変えなかった。が、実際のところ、彼はひっそりと、この古来稀に見る大芝居を仕組んでいたのだった。

さてもこの日の晩、党中央の信任を得て彭真を失脚させ、「五・一六通知」の御墨付を手にして帰宅した康生は、客間に入るや、傍若無人に詩を吟じ始めた。

昔日あくせく齷齪はこりトシテ夸足ラズ、
今朝放蕩トシテ思ヒ涯無シ、
春風意ヲ得テ馬蹄疾シ
一日尽ク看ル長安ノ花

吟じ終わると、彼は口髭をなでつけ、満足気にはっと一息ついて、ソファの上に身を投げ出した。彼の妻、曹軼欧はその満足そうな様子を見て、事が順調に運んでいるのを知り、夫の傍に腰をおろした。

「軼欧、事はすべて意のままに運んでいるよ。彭真はもう、これで完全に終わりだろう」

「でも、何か罪名が要るでしょうに」
曹軼欧が尋ねると、康生はこう答えた。

「通達は、もう発したよ。肝腎なのは、今度は下の方を焚きつけることだ」

「乱世も怖れず、ってわけね」

「乱れりゃ乱れる程、いいんだ。彭真は、もうお仕舞いさ。また這い上がって来ようもんなら、ぐっと捉まえときゃいい」

曹軼欧はなんとなく夫の言う理屈が分かったようで、もうそれ以上は何も聞かなかった。康生は妻の手をしっかりと握り締めて、こう言った。

「お前の、例の友達に来てもらいなさい。今が、彼女の出番なのだ」

曹軼欧はうなづいた。

この曹軼欧の友人は名を聶元梓といい、北京大学の学部党総支部の書記をしていた。ちょっと語ろうにも、なかなか経歴の複雑な人物で、曹軼欧とは30年前、解放区で知り合った。彼女らは、同窓の間柄ということでつきあうことができたが、聶元梓にとって、曹軼欧の様な雲の上の世界に通ずる友人を得たことは、無上の幸せだった。

ここ数日、北京大学の構内から、三家村グループを批判する文書が次第に減っていることが聶元梓には面白くなく、この批判キャンペーンをどのようにして続けたものか、良い知恵も浮かばなかった。幾人かの利に聡い連中が、彼女が大変なコネを握っていることを知って、尋ねて来ては何とか情報を探ろうとしていた。

ちょうどそんなある日、曹軼欧が電話をよこし、彼女を家に招いたのだった。聶元梓は、天にも昇らんばかりで、出入りの情報屋に言いつけては、ひそかに曹軼欧の消息を探らせ、そうして康生邸へ出かけて行った。

聶元梓が訝しく思った程、贅を尽くした酒肴の饗応も済み、客間に戻ると、曹軼欧は聶元梓に上等の茶をすすめ、彼女の傍によりそい、こうささやいた。

「元梓、今日あなたに来て頂いたのは、たくの康生が、あなたに相談があるからなのよ」

聶元梓は、恐れかきこまって、正面の康生の方
に引き直った。

「どういったことでしょうか。どうか、何なりと
おっしゃって下さい」

康生は、大きくうなずくと、口を開いた。

「情勢は順調に展開しておる。今日、中央では
通達が一件通過してね、これでもう彭真は終わり
だよ。ところがだ、あの辺の取り巻きどもがまだ実
権を握っておるんで、事が何かにつけやりにくい。
これには、下の方から造反をやらしてもらわんこと
にゃ、どうにもならんのだよ。そこでだ、私も家
内も、北京大学で一つ蜂の巣をつついてやろうと
考えたんだが、どうかね。一つあなたの手で、大
々的に壁新聞を貼り出しては貰えんかね」

聶元梓は、思わず目を見開いて言った。

「彭真を、死地に追い落そうと言われるのです
か」

康生は、狡猾そうな笑みを浮かべた。

「こんな事は、別に目的でも何でも無い」

聶元梓はこの言葉を聞くや、冷たい汗が全身を
流れ、言葉を継げなくなった。康生は、聶元梓が
怖じ気づいた様子を見て取ると、こうつけ加えた。

「政治をやるのには、勇気が必要でね。チャン
スというのは、実に得難いものだ。このたびの運
動ばかりは、是非とも大々的にやって、世直しを
せにゃならんのだ。今、あなたが飛び込んで来て
下されば、あなたはつまり、開国の功臣というわ
けなんですかな」

言い終えると、康生はメモを一枚聶元梓に手渡
した。彼女が受取って目を通すと、メモには北京
大学と北京市委員会の「罪状」のあらましが書か
れていた。

彼女の手は震えた。一たびこの様な壁新聞を貼
り出せば、その結果招くものは、中国全土に大混
乱を引き起こすことでしかあり得ないのだ。成功
すればまだしも、仮に失敗すれば、彼女は歴史上
の大罪人となってしまう。しかし、康生の言葉の

誘惑には抗し難く、彼女はついにこう言ってしま
った。

「それで、いつ、貼り出しましょう」

康生は、

「早ければ早い程いいでしょう」
と、笑った。

「ならば、私は早速」

「結構。私の秘書をあなたに同行させます。書
き終わった草稿は、こちらに持ち帰らせましょう。
あなたの壁新聞は、貼り出された翌日に、放送局
から全国に向けて放送される手筈です。そうなっ
たら、あなた聶元梓は、もう今までの聶元梓では
なくなるのですぞ」

客間には、暫し康生の笑い声が響きわたったの
だった。

1966年5月25日。聶元梓は、あのセンセーショ
ナルな壁新聞を貼り出した。6月1日、康生は、
党中央の名で、中央放送局に対して、聶元梓の壁
新聞の全文を全国に向けて放送するよう命じた。
果せる哉、幾千万にも及ぶ善良な人々が、まんま
と彼に騙され、かくして空前の一大騒動が神州の
大地を席卷することになったのである。

即ちこの時、蒯大富という文革のアダ花が、世
に現れたのである。これは正に、

隐患未ダ識ラザルニ、終ニ乱ヲ作り、

東窓ノ事、又重ネテ生ズ。

と、言うべきであろう。

蒯大富が、如何にして世に出たのか、お知りにな
りたい向きは、次回を乞う御期待。

第2回 虚栄浸身、父ヲ識ラズ

利欲熏心、乱賊ト做ル。

クワイダーフー
さても、この蒯大富。元は江蘇省の出で代々田
舎住まい、父は軍の幹部だから、当時の基準から
言えば、根っからの「紅五類」にかぞえられよう。

父は子の栄達を望み、苦心惨憺の末、息子を育て上げたのだった。彼は、幼少の頃から非常に聡明で、甚だ横着なわりには、何にでも手を出したかった。

ある日のこと、親父殿は池で何匹かの鯉を捕り、家に持ち帰ってかみさんに煮させた。飯の最中、父は煮魚を指しながら、その頃既に中学に上がっていた息子に向かってこう言った。

「鯉というのは、魚の王様だ。誰にでも喜ばれる。お前も大人になったら、この鯉みたいに誰にでも好かれる人にならなきゃいかんよ」

が、蒯大富は答えて曰く、

「誰が魚なんぞになって、人に喰われてやるか。俺ァ網の方になって、魚をとっつかまえて、喰ってやるんだ」

これを聞いた父親は、びっくり仰天。母親に向かって、

「こいつは、もっと駄にゃならんぞ！」と、叫んだものだった。

しかし、父親には眼力がなかったと言えよう。数年後、蒯大富は大学入試の難関を突破、みごと最高学府、清華大学に合格したのだった。

合格通知を受け取るや、蒯大富はもう得意の絶頂。その彼が先ず思ったことといえば、網になって魚を捕える側になることであり、贅を尽くした日々を送ることであった。しかしながら、目下のところはいささか手元不如意で、仕方なくボローツを身に纏って清華園にやって来たのであったが、これが却って教授たちに気に入られたりした。

瞬く間に1年が過ぎたが、蒯大富は一度も帰省しなかった。これが父親の癪に触ったようで、秋風の立つ頃、老父は一家の財を傾けて切符を買い、汽車に乗り込んで北京まで倅に会いにやって来た。

清華園の入口で、父親は手紙を取り出して門番に請い、息子を捜してもらった。30分後、先の尖った革靴と、ぴっちり折目の付いたズボンを穿き、髪を七三に分けて眼鏡をかけた青二才が彼の目の

前に現れ、小声で「おやじ！」と呼ぶ。よくよく見れば、紛れもなく自分の息子であった。老父は驚き半分、そして喜び半分であった。1年程見ぬうちに、こうまで男振りを上げた息子を訝りはしたものの、立派になったさまを見れば、今までの苦労も無駄ではなかったと思った。が、故郷のことなどとくに忘れていたところへ、突然現れた田舎臭フンブンたる父親を見て、当の蒯大富が顔色をなくしていることなど、老父の方ではとんと気付きはしなかった。

蒯大富に連れられて寮に案内され、座ったばかりのところへ、級友が訪ねて来た。扉が半開きになっており、その友人が、

「この田舎の人は、誰だい？」

と、尋ねると、蒯大富は、

「うちの親戚でね、北京に用足しに来たついでに、ちょっと物をことづけてくれたんだよ」

と、小声で答えたのだが、父親はしかと聞きつけ、息子の意図を察するや、烈火の如く怒り、立ち上がって扉を開け放つと、大声でどなった。

「大富、わしゃお前のおやじだ！」

友人もこの怒号を聞き、また蒯大富のバツの悪そうな様子を見ると、たちまち二人の関係を察し、声も立てずに階下に降りて行った。かくして、この1年ぶりの父子再会劇の顛末は、学内に広まることとなった。折から大学では、自己教育運動が行われていた。勿論、蒯大富がブルジョア思想汚染の典型たるに不足のあろうはずもなく、級友たちからは、手厳しく批判を受けたのだった。

蒯大富の評判は、決して芳しいものではなかったが、かと言って、決して網になる夢を忘れたわけではなかった。2年後、聶元梓の壁新聞がラジオで伝えられるや、モルヒネを打ったように、にわかには元気倍增した。彼の鋭い政治的嗅覚によれば、栄達の日はずいぶん訪れたのである。

6月2日、彼は聶元梓に励ましの手紙を書き、清華園に戻ると、一気に十数枚もの壁新聞を書き

上げた。1枚書いては貼りに出るたび、彼は離れた所に立って、人の注目を集められるか否かを観察するのだった。彼は、たった1枚の壁新聞で天下にその名を轟かせた聶元梓の手並みの鮮かさに敬服し、自らも清華の聶元梓になろうと心に決めていた。だが、清華園の中はもう壁新聞で埋め尽くされており、彼の書いたものなど、大海に木の葉数片を投じたようなもので、誰も特別な注意など払ってくれそうもない。蒯大富の悩みは尽きなかったが、ついに彼は悟った。聶元梓に追いつきたくば、聶元梓よりもさらに左になればよいのだ、と。

真夏のある夜のこと。円明園の廃墟は、時折月光の下を追いかけ合う野兎以外、人を不安にするほど静まり返っていた。突然、廃墟の巨石の上に立ち上がった何者かが、荒野に向かって大声で叫び始めた。「そは誰ぞ、右へ向かわんとする者は。左へ、左へ、左へ！」——それは、マヤコフスキーの詩であった。叫び終わると、この人影は塑像のように巨石の上に立ちつくし、そしてまた、同じ詩を大声で誦じては、再び沈黙するのだった。夜半、その影は消えた。

翌日、清華園に「“一切を疑え” 万歳！」と、題する壁新聞が貼り出された。このテーマは人々の注目を集め、みな十重二十重に取り囲んでは見入っていた。そして、この壁新聞はまた、男女一組の、清華園に到着したばかりの人物の注意をも引きつけたのだった。

この二人、男性は葉林といい、女性の方は劉少奇夫人の王光美で、中央が清華大学に派遣した工作組の正副組長であった。朝、仕事にかかると、流れる汗をぬぐう間もなく学内の壁新聞を見て回るのである。学内の壁新聞は、その数こそ多かったものの、大部分は空叫びの、無内容なものばかりだった。二人は、沢山の人が一枚の壁新聞を囲んでいるのを見ると、人垣の中に割り込んだ。そこに書かれた一つ一つの文字は拳程の大きさで、

特に目新しい内容ではないかに見えたが、文章の最後に「現存するもののすべてを打倒せぬ限り、新生中国を創造することはできない。一切を疑うこと、万歳！」と書かれているのを見て、葉林は心中驚きを禁じ得ず、署名に目をやり、「蒯大富」という名を胸に刻み込んだ。

数日後、工作組は全学の職員・学生による合同集会を召集した。席上、葉林はマイクに向かい、

「清華園における、文化大革命の形勢は良好ですが、一部の不隠分子による火事場泥棒的な行動は、断固阻止せねばなりません。蒯大富なる輩は壁新聞に、一切を疑うべし、我々が現有するものすべてをひっくり返せ、などと公然と呼びかけていますが、ならば彼の輩は、社会主義制度まで打倒せよと言うのでしょうか。これは、正に右派の理論であります」

と、述べた。その声は朗々と響き、会場の数万人の人はしんと静まり返っていた。

蒯大富はこの話を聞くや驚き、そして目を白黒させて、危うく地に倒れ伏すところであった。やっとのことで寮まで帰り着くと、ベッドに横になって思案を巡らせた。ここ数日というもの、新聞の社説はどれも民衆の造反を鼓舞しているというのに、工作組は何だってまた、あべこべに俺をたたこうというんだろう？ どうやら、中央にも内部矛盾が生じているようだ。よし、どちらが生き残るかってことだな。俺は、もうこの道を歩き始めたんだから、こっちに行ってやろうじゃないか。——野心を逞しくすると、彼は身を起して筆を執り、工作組へ宛てた壁新聞を書き始めた。

運動場での集会が散会となった時、人々は議長席正面の建物の壁に貼られた奇妙な壁新聞を発見した。文字は何も書かれておらず、ただレンガ大の拳が天に向かって突き上げられている。署名を見ると、葉林が今しがた名を読み上げたばかりの蒯大富であった。皆、大いにこれを奇とし、ざわめき押し合いながら見入り、かくして蒯大富はに

わかには清華園第一等の時の人となったのである。

文化大革命の動向は、この時点ではまだ明確にはなっておらず、何をどうしたものやら誰にも分かってはいなかった。葉林、王光美にしたところが、ただ「反右派闘争」「四清」運動の時と同様、右派を摘発した上で、反対勢力をオルグして右派を叩けばよい、と考えているにすぎなかった。

蒯大富の評判はもともと芳しくなかったのに、この時工作組が彼を批判したことにより、彼の立場は一層まずいものとなっていった。

蒯大富は、もうこらえ切れなくなった。そして、突然彼の偶像である聶元梓のことを思い出すと、人々の隙をぬって清華園を抜け出して、北京大学へ出向いた。残念ながら聶元梓には会えなかったがそこで彼は一人の新華社記者と知り合った。姓を董、名を申といい、齡三十を越えたばかりの油の乗り切った記者で、蒯大富の話を聞き終えると、彼の肩をポンと叩いて優しくこう言った。

「君の名前は知っている。私の見るところ、君は革命左派だ。江青同志も言っている通り、昔から学生運動を鎮圧しようとした者に決して良い末路はないのだからな。葉林が君に闘争をしかけているのは、自分で自分の首を締めるようなものだ。彼に勝ち目はないよ」

蒯大富はこの言葉に激しく興奮し、あわただしく問いかけた。

「董同志、あなたは中央文革小組の人に会えますか」

董申は、

「君と清華の情況は、数日前中央に報告しておいたよ。君は気を大きく持って、葉林、王光美と存分にやりあいたまえ」

蒯大富は、この話を聞いてからというもの、新天地を見だし、大山がどんと後ろに構えていてくれるかのような気になり、もう孤独を感じたりはしなくなった。

大学に戻った後、部屋の中で考え込むことまた

数日、彼はまたもや人をアッといわせる挙に出た。葉林は自らの誤りを認めよ、また同人に対しては公開査問を実施すべし、さもなくば自分はハンストを決行する、といった内容の壁新聞を葉林宛てに書いたのである。

またたくまに、清華園には「蒯大富旋風」が巻き起こったのだった。

これ正に、

生、太平ニ遇ヒテ、浪、起コルコトナク、
時、乱世ニ逢ヒテ、奸雄ト成ル。

と、いうべきであろう。

蒯大富のハンストが如何にあいなったかについては、次回を乞う御期待。

第3回 卒ヲ保ツハ、只卒ノカラ用中 ンガ為ニシテ、賊ヲ助ケテハ、 甘ンジテ賊ノ拳ト做ランコトラ 願フ。

さても蒯大富は、葉林に誤ちを認めるよう強く迫っていた。が、葉林こそもともと党工作組のリーダーであり、そんな男が一体どうして一右派学生に対して誤りなぞ認めることができようか。蒯大富のハンスト宣言など彼は一笑に付してしまった。3日が過ぎても、蒯大富は葉林から何の反応もないことを知ると、またもや葉林に宛てた壁新聞を書き、再びハンストを宣言した。葉林が誤りを認めるまでハンストを続けるというのである。

蒯大富は寮の中でころがっていたが、寮の外はかえって熱気を帯びてきていた。清華大の関係者のみならず、学院路に軒を連ねる近隣の各大学でも、清華大の蒯大富がハンスト決行中であることはつとに知られており、皆せめぎあってはその消息を探りにやって来た。各大学では、どこも右派学生を捕えたりしてはみたものの、その日に至るまで蒯大富がまだ頑張り通していることは実際驚嘆に値することには違いなく、人々はどんな結果

になるのやらと見守っていた。

あっという間に4日が過ぎ、また夜が訪れた。ここ数日というもの、葉林からの回答がないばかりか、董申からすら何の音沙汰もなかった。蒯大富もいささかあわて始め、既に飢餓感すらなくなった身を支え起こし、月に照らされて静まりかえった部屋を見回してこう考えた。「あの葉林め、なかなかやりやがる。俺がこうしているのに、中央文革小組じゃ何で態度を表明しないんだ。まさか本当に俺が死ななきゃならんというんじゃないかならうな。こんな革命、誰がやってやるもんか。明日、葉林がまだ返事をよこさないなら、俺はもうハンストなんざやめろぞ」——ここまで考えると、彼の心もすっきりとし、目を閉じて眠りについたのだった。

夜半、泥のように眠りこけていた彼の耳元で、何者かが彼の名前を呼んだ。目を開けてみると、そこには董申その人が立っていたのだが、蒯大富の方ではその姿を見てすっかり泡をくってしまい、また腹も減りきってしまっていて言葉が出てこなかった。

この董申、新聞記者とは名ばかりで、実は中央文革小組の連絡員であった。彼は、起き上がろうとする蒯大富を押し留めると、小声でこう言った。

「蒯君。江青同志の言葉を君に伝える。同志は君のハンストには賛成しかねておいでだ。生きのびて葉林と闘うようにとのことだよ」

蒯大富は、江青が自分に託したという言葉を開くや、眼鏡の奥でにわかに瞳が輝き始めた。まさに痩せ細る思いで今日までやってきたが、その苦労も無駄にはならず、ついには文革のリーダーまでも動かすことになろうとは思ってもよらなかった。起き上がって姿勢を正すと、

「で、どういう具合に闘えと？」と、尋ねた。

「江青同志は、君に清華大学内で葉林と対立する一派の旗挙げをしてもらいたいとの意向なのだ。

大いに乱れてこそ大きく治めることが出来ようというもんじゃないか。清華大を掻き回せば掻き回すほどいいんだからな」

蒯大富は意を得るや、腹が減っていることも忘れて床を離れた。そして、ちびた筆を動かし始めたのである。

翌朝、寮の前に蒯大富の声明が貼り出された。

「この数日間にわたる闘争で、革命とは正に生死を賭した戦いであることがよくわかった。私は生き^{ながら}存え、一切の反動勢力と徹底的に闘い、反修正主義闘争の戦場に名誉の戦死を遂げんことを願うのみである。故に、私は以後、ハンストの如きナンセンスな闘いを取り止めることを宣言する次第である」

故意によるものか、あるいは全く偶然だったのかは知る由もないが、蒯大富がハンスト放棄を宣言した翌日、康生が清華大学を訪問し、全学集会の席上二つの声明を発表した。すなわち第一点として、中央の決定に基づき工作組を解散すること、さらに第二点として、蒯大富の解放を伝え、蒯大富はブルジョア反動一味の迫害をこうむった左派であること、を述べたのだった。

散会後、康生は人をやって蒯大富を呼んで来させ、彼の手をしっかりと握り締めながらこう言った。

「私は、中央文革小組と江青同志を代表して君に会いに来たのです。君のその闘争精神は実にすばらしい。清華全学の学生諸君の範とすべきものがありますよ。私は君に、『革命無罪、造反有理』という言葉を送りましょう」

蒯大富は感涙に咽び、両手で康生の手を握ったまま、やっと流行の言葉を口にすることが出来た。

「蒯大富、誓って文革小組の拳となり、海枯れ、石^{ただ}爛れるとも、心変わりは致しません」

康生は、満足気にうなづいて言った。

「これからの闘いは苦しいぞ。君は肚を据えて

かからなくては」

蒯大富が、恭順の意を示して、

「康同志がいて下されば何も怖くはありません」と、答えるのを聞くと、康生は首を反らせて呵呵大笑するのだった。

他方、葉林は康生による突然の工作小組解散宣言を聞くや、事の重大性を痛感した。忍び難きを忍んで一隊を率いて清華大学を去り、本部に帰って行くしかなかった。

こうして、清華大学から針路決定機関がなくなると、にわかに無政府状態が生まれた。学内の野心家たちは、誰も彼も乱世の王者をめざし、人々の情熱を煽っては争って旗挙げをしていた。こうした小物どもの中であって、ハンストを経験し、センセーショナルな声明文を書き、そして中央の指導者とも会見した蒯大富の名声は自然他とは一線を画していた。彼は自分の属するグループに政治・文芸色の濃い名称を冠していた——その名も、「井岡山」。彼は、学内の勢力が各派共にどんぐりの背比べである点に注目すると、早速提案書を起草し、学内各派の大連合を呼びかけた。また、井岡山のメンバーを率いては学内で、歴史歌曲「団結は力なり」を唄ったりもした。この方法は効果満点、日ならずして学内には各派の井岡山グループへの加入声明が満ち、半月とせぬうちに井岡山の旗印は清華大学のキャンパスを席捲した。蒯大富は当然のことながら、最高指導者の任に当たることとなったのである。

その日、蒯大富が数万の配下のために、まる1日かかって幾人かの老教授たちを総括にかけ、さて次なる標的は、と思っているところへ董申がリュックを担いでやって来た。

「ちょうどいいところに来てくれましたよ。次の一手、一体どうしたもんですかね。日がな一日、あんなおいぼれた本の虫どもとやりあって、何の意味があるんです？」

と、蒯大富が切り出すと、董申は笑って、

「君は、葉林のことを忘れちゃったのかい」と、問い返した。

蒯大富が、

「葉林なら、とっくの昔に本部に逃げ込んでいましたよ。どうやって今さら尻尾を掴むんです」と、こぼすと、董申もこう言った。

「君はまだこの文化大革命を真底理解していないから、そんな風に畏縮してしまうんだ。あの葉林にしたところが、誰が清華大学に派遣したのか知ってるだろう」

蒯大富は首を横に振った。

「王光美が来たのをみて、まだわからないのか」董申は声を落してさらに続けた。

「君にトップシークレットを教えておこう。このたびの文化大革命は、彭、羅、陸、楊の4人をお払い箱にただけでは終わらないんだよ。分かるね」

それを聞いた蒯大富の目はキラキラと輝いた。

「本格的な世直し、ってわけですね」

董申は、蒯大富の肩を叩いて言った。

「そう思ってくれるところをみると、どうやら君も文化大革命が何たるか理解出来たようだね」

蒯大富はしばし黙り込んだ。その時、彼の脳裏には、網になって魚を捕まえる側になるという夢がまたふとよみがえったのだった。彼は、一句一句かみしめながらこう言った。

「いいでしょう。やるからには、大いにやろうじゃないですか。先ず、手始めに葉林を血祭にあげてから、劉少奇の方を料理してやりましょう」

翌朝、蒯大富は井岡山グループの戦闘部隊を率いて、葉林を引っ捕えるため、参謀本部に乗り込んだ。ところが本部の入口に着いたものの、門衛が一行の前に立ちはだかって一歩たりとも中に入れまいと頑張った。蒯大富はここぞとばかり眠鏡をちょっと直すと、こう呼びかけた。

「我々は清華大学の者だ。葉林は清華大学において大犯罪を犯している。我々は葉林を連れ帰り、

彼を査問にかけするため、今日こうしてやって来たのだ」

門衛が、

「申しわけありませんが、参謀総長の指示がないと、誰も通せないことになっておりますので」と、おずおずと答えるや、蒯大富、これを聞きとがめ、

「こいつは保皇派だぞ！」

と、一喝した。そうして、後を振り返ると、井岡山グループを指揮して、「造反有理」の歌を唄い始めた。これには衛兵たちも如何とも出来ず、ただ立ちつくすばかりだった。

しかし、一方の蒯大富も、進むことも引くこともままならないと知って、冷汗が流れるほどにあせり始めていた。が、数百人はいようかという観衆が事の成り行きを見守っているのに気がつくや、彼はすぐに自分が葉林とハンスト戦術で闘ったことを思い出した。つまり、彼はこう考えたのだった。事を大きくしなければ、結果も大きく膨らみはしない。またハンストをやってみせて、葉林を引っぱり出すといううまい手を使わない法もなかろう。それに、中央の文革派の指導者も決して事態の進展を座視したりは出来まい。事が大きくなれば、自然、態度を表明せざるを得ないだろう。

そうして、彼は井岡山のメンバーや見守る群衆の方に向かって双手を振り上げてみせ、激昂一番演説をおち上げた。

「造反派の戦士諸君！ 葉林が清華の学内で大犯罪を犯したことは極めて明白だ。しかし、保皇派どもは葉林を擁護し、彼に我々造反派の批判を受けさせまいとしている。革命とは絵を描いたり、手芸をしたりすることではない。どちらが生き残るか、食うか食われるかの闘いなのだ。毛沢東思想と毛主席の革命路線を守るため、私は葉林を清華の公開闘争の場に送るまで、ハンガーストライキを執行することをここに宣言する」

井岡山のメンバーの多くはいささか過激な青年

たちだった。元より反革命の意図などなかったのだが、すっかりのせられていたため、自らの行動はすべて革命の壮挙だと思い込んでしまっていた。平生から、蒯大富の奇をてらったハンストなどを妙に有難がっていた彼らは、この時、蒯大富と共にハンストをと聞いて感激に身を振わせ、一斉に蒯大富のハンスト宣言に異議なしを叫んだ。こうして数百もの人間が、お経を誦える坊主のように地べたに座り込んでハンストを開始したのだった。

さて、董申はというと、ずっと遠巻きに見守る人々の中に粉れて見ていたが、蒯大富が配下の学生を率いてハンストを始めたのを見るや、心中秘かに快哉を叫び、はやる気持ちを押えてアジトに戻り、早速江青の元に電話をかけた。この時、時計はすでに午前10時を過ぎていた。

江青はやっとパジャマ姿で起き出したばかりだったが、董申の報告を聞くと、躍り上がって喜び、董申に訓令を発した。

「すぐに各大学とも造反派慰問団を組織するよう手配しなさい。頭数を多くして氣勢を上げること。それから、蒯大富たちには水を差し入れておやり。水の中にはブドウ糖を入れて、身体をこわさないようにしてやるんだよ」

江青は、一旦電話を切ると、またすぐに林彪の電話番号を回した。

林彪と葉群も起き出したばかりで、居室で着換えをしていた。葉群は電話のベルが鳴ったのを聞くと、電話をかけてきた人間と交換手の気のきかないのを罵りながら、受話器を取った。が、電話から流れて来る江青の声を聞くや、たちまち顔に笑みすら浮かべて、仲の良い姉妹のように喋り始めた。

林彪に電話するのには一定の時間制限が設けられており、親族以外はプライベートな時間に電話することを禁じられていた。江青と林彪は、以前には何の往き来もなかったにも拘らず、どうしてこの時、あたかも親友朋輩のように親しげにでき

たのだろうか。江青の方では、林彪は毛語録を振りかざしてはいるものの、一皮むけば野心満々であり、自分にとって最大のライバルであることなど先刻承知していた。ただ、一度に多くの敵を作ることとは得策とはいえない。ましてや林彪は軍の指揮権を一手に握っていたため、彼女としては先ず彼と組んで元老たちを片付けておいて、それからというわけなのだった。奸知に^た長けた江青は、林彪を引き入れるため、葉群にこうまで言っていた。

「あなたに今、どんな敵がいるのか話して下さいませんか？ 私の邪魔をする人については、あなたにもちょっと力になって頂きたいし。私たち、助け合って行きましょうよ」

葉群はこの話を聞いた後、30年代の「藍蘋」の人となりを知る芸術家たちを、ほとんど全員投獄してしまった。また江青も、葉群がニセ党员であったことを知る生き証人を、大方刑務所に叩き込んでしまい、互いのために口封じを図ったのだが、これは後日譚である。何故林彪と江青が接近したかとあえて問えば、忘れてはならないことは、結局、二人は同じ気持ちにあったと言うことである。

話をもとに戻そう。林彪は自ら電話を取るということはしないので、電話のベルが鳴っても、さっさと寝室に戻ってしまった。葉群は電話を受けると寝室まで行き、林彪に、

「江青さんからです。何かご用らしくってよ」と、伝えた。林彪は江青からと聞くと、パジャマを引っかけて寝室を出た。

江青は、誰かが受話器を取り上げたのを聞くと、すぐに相手が林彪本人だと察し、

「副主席かしら」

と猫なで声を出した。電話から流れるこの声に、林彪は陰険な顔にも、笑みを浮かべた。

「そうです。江青同志ですな。どういうご用向きか承りましょう」

「ええ、他でもございません。あの葉林のこと

なんです。この人、劉少奇の方から清華大学に派遣されて、工作組のリーダーとしてあそこの坊やたちのお守りをしてたんですけどね。ところが、今度はその坊やたちの方が葉林を清華大学に連れ戻して、査問にかけようとしてるんですって。そうしましたらね、葉林が参謀本部に逃げ込んだっきり出て来ないものだから、坊やたちも手の施しようがなくて、本部の正門前に座り込んで、ハンストを始めちゃったんです。坊やたち、どうしても葉林を捕まえて、劉・鄧ラインの反動路線を批判するって言うんですけど、これはいけないわけかしら」

林彪はちょっと考え込んだ。

「劉・鄧ラインという言い方は、まだ出来ておらんでしょう」

「副主席さん。葉林を査問会送りにして下さいな、あの坊やたちだって、すぐにそういう風に叫び出しますよ」

と笑う江青の奸計に、さすがの林彪も一本取られた恰好になり、合の手を入れるかのように、

「よし。すぐに葉林を清華大学に行かせようじゃないか」

と確約を与えた。しかし江青はなおも安心できず、受話器を置く間際になって、秘事を囁くように林彪に言った。

「副主席。あなた、あの参謀本部を動かさせませんか？ あそこの将官さんたちときたら、一筋縄ではいきませんものね」

江青の激励法は、果せる哉、効果絶大であった。林彪は江青との用談を終えるとすぐ、秘書に参謀本部に電話させ、葉林を引き渡すよう伝えた。しかし間もなく秘書は帰って来て、こう復命した。

「副主席。参謀本部では葉林が健康を害しており、査問に耐えられないことを理由に、葉林の身柄引き渡しを拒んでおります」

林彪はこの報告を聞くや、激怒した。

「葉林が行かんと言うなら、兵を遣って引っ立

てろ！」

そうして、片や参謀本部の参謀たちを罵り、片や何人かを連れてあちらに出向き、葉林を捕えて来るよう、秘書に命令を発したのだった。

これ正に、

巧ミニ苦肉ヲ施シ美譽ヲ得、

狼狽奸ヲ為シ神州乱ル。

の言葉通りではある。

第4回 司令^なト^{なら}做起り、登台シテ事ヲ議シ、女皇ニ効ヒテ、躬身呐喊ス。

さてこの時こそは、林彪の権勢が頂上を極めていた頃で、彼の権力の前には、何者も抗し得ないのだった。彼の秘書が数人の手勢を連れて参謀本部に現れ、参謀総長に溜々と来意を述べたてても、参謀総長には抗する術もなかった。ただ蒯大富と相談した上で具体的な時間を決めてほしい、その上で葉林を査問会場に出頭させるから、としか言えなかった。葉林がその後、清華園の査問会場に赴き、どのような悲惨な目に遇ったかは語るに忍びない。

一方の蒯大富は、このたびの勝利は、江青、林彪の支持を得たことによるものと知って、感涙にむせんだのだった。

数日後、雑誌『紅旗』は、「毛主席を代表とするプロレタリア革命路線の勝利」と題する社説を掲げた。これ以後、古参幹部たちを総括の槍玉にあげる闘争方法が、神州の大地を席卷したのであった。

ここで少し、紅衛兵のことについて触れておかねばなるまい。文革が始まったばかりの頃、清華大学附属中学に在学中だった幹部子弟の何人かが、少しばかりの「内部参考消息」を聞きかじった結果、単純にも、党内に毛主席に反対する者が現れたと思い込んだ。彼らは一片の愛国心を頼りに、

圓明園の廢墟に会合、ひそかに組織を結成した。これが「紅衛兵」と呼ばれるもので、毛主席の赤い衛兵の意である。この組織は、その初期段階には地下で拡大していったが、後に各中学で相継いで紅衛兵集団が組織されるようになると、もう公然と旗を掲げるようになった。当時、一応「非合法」ということになってはいたが、江青が北京の天橋劇場で公然と紅衛兵と会見してしまったため、前述の工作組としては、その非合法性を宣言しにくくなったわけである。8月18日には毛沢東主席が天安門での紅衛兵との会見に応じ、自らも紅衛兵の腕章を着けたため、紅衛兵運動はまたたく間にひろがっていった。当時、北京の大学生は、所謂「紅五類」を主体とする全北京市内を網羅する紅衛兵司令部を結成していた。しかし後には、この司令部が高級幹部の子弟で占められていると見る者も多くなり、さらに別の紅衛兵司令部を組織するに至った。人々は2派に分かれ、この2つの組織はそれぞれ「一司」・「二司」と呼ばれた。

さてこの頃になると、葉林とハンスト戦術で闘った蒯大富の名は、すでに全中国に遍く知られており、彼自身、筋金入りの造反派を以って任じていた。その彼が、どうして「一司」・「二司」の三下どもの下に居れようか。そこで彼はまた人を寄せ集め、「三司」の看板を掲げたのだった。当然蒯大富が司令におさまったのだが、「三司」にはもう一人の重要人物が名を連ねていた。姓を王、名を大賓と言い、地質学院にあった「東方紅」の司令として、やはり全国的に有名な人物だった。この二人に、航空学院の韓愛晶、北京師範大学の譚厚蘭、それに御本尊の聶元梓が、世に言う文革の「五大学生指導者」なのである。

ある日、三司の面々は清華園内で合同会議を催し、次なる行動予定の討論を準備していた。数人の司令、副司令たちは皆、さすがにいくばくかの政治的風格を身につけており、それぞれ襟を正し

て席につき、一点を見据えては考えをめぐらせていた。ただ、底の薄さは覆うべくもなく、政界ではまだまだひよっ子にすぎない彼らは、そうして思案に暮れてみたところで、おいそれと作戦計画は浮かばないのであった。

王大賓は少し年齢が上だったので、他のやっとう乳臭さが抜けたばかりの連中のように、中身がないように見られることを嫌い、実際謀り事をめくらししているかのように装おうとした。

「僕の見たところ、我々三司の全国への影響力は極めて大きいようだ。各地の造反派の学友諸君は我々の行動を指針としており、我々を中央文革派の直属部隊とみなしているのだ」

蒯大富はこの王大賓の発言を聞くと、肩を揺らして笑った。

「中央の文革派の戦士なら、結構じゃないか」

王大賓はさらに続けた。

「だからこそ我々の行動は、必ず中央文革派の態度と一致していなければならないのに、実際には中央の動静については、何も知らないではないか」

この発言で皆は静まり返り、会場は水を打ったようになった。蒯大富が王大賓に考えを述べるよう促すと、この知恵者で、どこことなく諸葛孔明のような知謀家気質の王大賓は、一呼吸おくと発言を続けた。

「我々が今なすべきことは、我々の手の中にある世論と言う道具を使って、大いに勢いを盛り上げることではないだろうか。地方では、我々を中央文革派の親衛部隊と見ているではないか。そこで我々としては、各自の組織の機関紙にもっとセンセーショナルな社説を発表してゆこうではないか。『中央文革の鉄拳となろう』でも、『中央文革と共に前進しよう』でも、『中央文革と心を一つに』でも、何だっていいだろう。同時にだ、陳伯達、江青の両同志に手紙を書いて、直接会って指示を受け、指導して貰うよう要請しよう。そう

してこそ、三司は文革のパロメーターたることができるのだ」

王大賓のこの悪にくみは、蒯大富を唸らせるのに十分だったが、それでもなおわずかの抵抗を感じた。

「大変いい方法だとは思いますが、ただ、あの董申がどこへ行ったか、ここ数日行方が知れないんだ。中央文革の連絡員の彼がいないのに、一体どうやって肝腎の手紙を届けるんだ」

「簡単だね。僕は王力の秘書を知っているから、彼を探し出せば済むことさ」

王大賓が事もなく言っただけのを聞くと、蒯大富もにわかに喜色を浮かべて立ち上がった。

「僕は大賓の意見に賛成する。あらゆる宣伝手段を大々的に使って、中央の文革派に我々への支持表明を迫り、会見を求めようじゃないか」

この数人から成る造反派の幹部たちは、普段から『ナポレオン伝』やヒトラーの『マイン・カンフ（わが闘争）』を研究しており、術策の用い方について大いに学んでいた。この権謀術数は効果絶大で、陳伯達や江青に一度用いただけでこうした巨頭たちを踊らせ、会見を承諾させた。しかしどうしてこの青二才どもに、江青ともあろう者が手玉になど取られよう。長年、政治に関与することを許されず、この半年程の間に天上に駆け昇ったとは言え、その地盤は脆弱で、自由に動かせる手勢すら持っていなかった江青である。そこへ三司のリーダーたちが、彼女への忠誠を申し出てきたのだから、彼女にしてみれば会見を承諾しない法はなかったろう。

この日、数台の乗用車は清華園に到着すると、そのまま壁新聞の貼り出してあるあたりまで乗りつけた。車が止まると先ず先頭の車から、灰色の人民服に身を包み人民帽をかぶった江青が下り立ち、続いて王力に扶けられつつ陳伯達も下車、張春橋、閔鋒、姚文元、戚本禹なども後続の車から姿を現した。

この時はまだ、江青の正体を誰も知りしなかった。大衆は虚像しか知ることができず、そのためほんの一時、人民の信頼と尊敬を騙し取ったにすぎない。

彼女は姿を見せるやたちまち学生たちに囲まれ、慈愛深い笑みを浮かべると、カン高い声を張り上げた。

「皆さん。私は毛主席と林副主席を代表して、皆さんに会うため、こうしてやって参りました」

この一言が終わるや、周囲の学生たちの間から拍手が沸き起こったのだった。

蒯大富はといえば、江青一行到着の知らせを受けると気ぜわしく出迎えた。一行を見守る学生たちの中には、一司や二司の学生も無論のこと混じってはいたが、中央文革派の高官たちを眺めていると、すぐさま三司の手によって井岡山司令部まで連行された。不公平だ、俺たちにも会わせろ、と言ってみたところで無駄なこと。蒯大富の方ではそんなことなど先刻ご承知で、巡察隊員を配置しており、一司、二司の学生を発見次第、連れ去った。

「江青同志は我々皆に会いに来たんじゃないか。何で君たちは一人占めしようとするんだ」と連れ込まれた一司や二司の学生が叫ぶと、井岡山の巡察隊員はこう怒鳴り返した。

「江青同志はな、造反派だけに会いに来たんだ。俺たち三司は筋金入りの造反派だぞ。三司に会わねえで、一体誰に会おうってんだ」

外野の争いはさておいて、とにかく江青は井岡山司令部に落ち着いた。ソファに身を沈め、かしこまって恭順の意を表している司令たちをぐるりと見渡して、至極満悦の様子だった。

「私と陳伯達、張春橋、それに文革小組の面々が清華大学にやって来たのは、はっきり言って、三司の同志の皆さんに会いに来たんです。皆さん方が反動路線の中から血路を開いて来られたこと、本当にご苦労に存じます」

江青のこの労いの言葉には、蒯大富も気を失わんばかりに感激し、あわてて答えた。

「三司は永遠に文革中央と共に歩みます」

「皆さんの忠誠心はよく分かっています。蒯大富さん、あなたの一挙一動だって、私は知っているんですよ。康生同志があなたの解放を宣言したのも、私の提案だったんですからね。皆さんが命令に従い、指揮を受けさえすれば、私たちは永遠に皆さんを支持します」

江青が笑いながらこう言うと、会談に参加したリーダーたちは、一斉に盛んな拍手で応えた。

そんな中でも、王大賓はやはり場数を踏んでいただけあって、こう問いかけた。

「我々は中央文革の鉄の拳となることを誓いますが、これからの行動は如何しましょう。どうぞ、存分に指示をお願いします」

陳伯達が笑いながら何かぶつぶつと喋ったが、如何せん、田舎なまりが強すぎて誰も聞きとれなかったので、王力が傍に身を寄せて、助け船を出した。

「陳伯達同志はこう言っておられます。諸君は大いに暴れてくれれば結構。それで大体正しい結果になりますから」

何人かの者は、さすがにこのつかみ所のない話にとまどった。まさか、どんな暴れ方をしても道理がたつと言うわけでもあるまいに。

張春橋は、数名のリーダーたちが困惑の表情を浮かべたのを、すかさず見て取った。

「あなたたちは、問題のある人物だけ捕えればよいと考えている様ですが、先ずは捕えてみることに先決です。本当に問題がない人なら、批判を恐れはしませんし、誤って捕えたところで、それは単なる誤解にすぎません。それもまた、本人をきたえるよい機会です。大事なのは、一人の悪人を取り逃さないことなのです」

まだ何人か釈然としない顔でいると、さらにこうハッパをかけた。

「混乱を恐れてはいかん。大混乱を経てこそ、本当によく治まるもんなんだ。乱れなければ、新生中国は創れはしない」

この言葉はどこか蒋介石の言った「千人を誤って殺しても、一人を見逃すな」というせりふに似ているが、この司令部リーダーたちを啓蒙すること、大であった。

蒯大富はこの時もうじっと座っていられなくなって、突然立ち上がった。

「江青同志。あの党内最大の走資派は、捕えられますか」

江青は陳伯達、張春橋に目くばせした後、こう答えた。

「これが本当の造反派魂ね。劉少奇の件でしたら、もうすでに、反党反社会主義と言うことに決まっています。具体的にいつ捕えるかについては、よく時期を見極めてからですが」

ここまで言うと、江青はその後を続けなかった。が、蒯大富にはまだよくのみ込めない——時期を見て？ いつ機が熟すると言うんだ。

江青の後に控えていた戚本禹が、江青の耳元に何事か囁くと、江青はまだ立ったままの蒯大富のために言葉を継いだ。

「機は、——造反派が熟させるのです。三司は造反派なのですから、責任は重大ですよ」

そして自分の言葉に頷くと、「そう、その通り………」と呟いた。

これより明らかな事など、他にありはしない。江青一行を見送ると、蒯大富は早速「三司は中央文革小組と共にあり」と題する、『井岡山』紙の社説をしたためた。この社説は、党内最大の走資派と最後まで闘うことをうたっており、このキナ臭い記事はたったの1週間で全国に流布するに至った。「党内最大の走資派」の呼称は、多くの人々の憶測を呼んだ。

この頃、北京市内では怪事件が発生していた。

毎夜、深夜零時頃になると、ラウドスピーカーを4個装着した1台の宣伝カーが徳勝門から旧市街に入り、鼓楼、地安門、北池子をめぐって崇文門、正陽門、宣武門の3門を抜け、再び東西長安街を走り抜けるのだが、途中、ボリュームいっぱいにしてスローガンを叫ぶ。

「党内最大の走資派打倒！」

「文化大革命を最後までやり抜こう！」

と言ったような叫び声が、北京の夜空に響き渡るのである。昼間の狂騒とあいまって、恐怖のあまり北京の市民は夜もおちおち寝られなかった。実際、この頃この声を聞くと、全身総毛立つ思いであった。

これ正に、

笑裡刀ヲ藏シテ毒策ヲ授ケ、

旗ヲ揺リ噪喊シテ忠良陷ツ。

と言うべきであろう。

第5回 軍師命^{とら}ジテ劉少奇ヲ揪^{たばか}エ 司令^{とら}騙リテ王光美ヲ取ル。

前回、北京城に連夜、奇怪な声が響くと言う話を書いたが、この声の主は余人ならぬ、蒯大富その人なのだった。江青との会見によって彼の勇氣は倍増し、自ら江青の拳を以って任じるまでになっていた。群衆を煽動して劉少奇を捕え、然る後に、中央文革小組は「人民の意志」によって党中央に態度表明を迫る。この、悪を懲らして民を安んじるという図式——江青は言葉にこそしなかったが、蒯大富の方では先刻お見通しとばかり、司令の体裁もかまわず片肌脱いだ気になって陣頭に立ち、毎夜宣伝カーに乗り込んで叫びまくっていたわけである。

が、蒯大富が入れ込んだわりには成果は大して上がりず、政局は平穩、中央の方にも特にこれといった動きは見られなかった。これには蒯大富もあせった。

こうして悶々としながら過ごしていたある日、張春橋から突然電話で、中南海の西門で会おうと言って来た。これには蒯大富も大喜びで、秘書を伴ってジープに乗り込み中南海西門まで来ると、秘書は車の中に残して一人で応接室に入った。

張春橋の方が先に来て待ちかねていた。蒯大富が入って来るなり、

「来てもらったのは他でもない、君たちのその鉄拳を借りたいんだ。劉少奇も鄧小平も、何としても懲りようとしな。そこでだね、君たちは持てる力のすべてを糾合して、奴らの名前をつき出して全国に知らせるんだ」

とまくしたて、蒯大富が佇立したままでいると、もう一言加えた。

「すぐにかかり給え！」

蒯大富は命令を受けると、意を得ていたとは言えやはりさすがに緊張した。張春橋の直命とあれば、その意味は極めて重大である。しかし彼はまた、中央文革小組が自分に寄せている信頼がいかに大きいかを感じ、江青と共に歩もうという決心は一層揺ぎないものとなった。張春橋は彼がすぐさま仕事にかかるよう促すと、他にもう用はなさそうだった。蒯大富も退出して車に戻ると、早速各大学でオルグ工作に着手するよう、秘書に指示した。

1966年12月25日、蒯大富は遂に約1万の学生を糾合し、長安街にアジビラを貼りながらデモを行った。蒯大富は、吹きすさぶ寒風に身を曝しながら宣伝カーの上に立ち、全国で初めて「打倒劉少奇！ 打倒鄧小平！」のスローガンを叫んだのだ。

この第一声は、文革開始以後数ヶ月間の謎に答えを与え、ニュースが伝わるや、全国各地で「劉・鄧打倒」を叫ぶデモが行われた。

例の董申とは言えば、全国各地を駆け巡った後北京に戻ると、息をつく間もないまま蒯大富の所

へやって来た。蒯大富に地方の形勢などを語った後、最後に蒯大富を指さしながらこう言った。

「君、蒯司令の名は中国全土に遍く知られているよ。これから出世しても、僕のことは忘れんてくれよ」

蒯大富は心中踊り上がらんばかりであったが、さすがにここは自重してみせ、

「まだ勝負がついたわけでもないのに、なんでそんなことが口にできましょう。劉少奇を捕えることについても、中央が未だに意志表示しないでいるところを見ると、抗争には熾烈なものがあるようです。中央文革小組では動きがとりにくいし、それで我々が先に動いているんですから」と答えると、董申はこう勧めた。

「僕の見るところ、まだ機が熟するには少し早いようだ。やはり外堀から先に攻めてみてはどうだね」

「外堀って、他にまだ誰がいるんですか」

「ひとつ内部消息を教えておこう。天津の南開大学で今、叛乱集団を一件調査中なんだ。調査は始まったばかりで範囲も広いんだが、どうやら劉少奇と関係があるらしい。奴の女房の王光美は、全国解放の間際になって解放区に来たらしいんだが、これが叛乱グループの特務かどうか調べてみるとちょっと面白いんじゃないかね。クロと出れば、これはもう決まりなんだが」

「じゃあ、王光美を中南海から連れ出して、今までの行状を聞き出せばいいわけですね」

ここまで喋ると、二人は声をひそめて相談にかかったのだ。

話は変わるが、50年代の末に、毛沢東主席は中央に対し、国家主席を今限りで辞任すること、そして次期主席として劉少奇の名を伝えた。その直後に開かれた第2期全国人民代表大会で、劉少奇は国家主席に選出された。劉少奇の双肩には重責がのしかかり、中国振興のため血を吐く思いで

奮闘する彼は、開国の政治家として、一枚の壮大な民族隆盛の青写真を胸に描いていたのだった。

新中国成立直後の政界は多士齊々、わけでも開国の4大指導者による内外戦略は、世界の矚目するところであった。4人の指導者は、各々才覚と性格を異にしていた。毛沢東はあけっ広げで言葉少なく、物事の大筋だけを考え枝葉末節には拘らなかった。周恩来は明るく闊達で、事の大小によらず無駄な行いがなかった。朱徳は朴訥で飾り気がなく、親友には心打ちとけるが、かりに辱めを受けることがあっても、暴言を吐くようなことは決してしない。劉少奇は常に重きをなして俗流に流されず、修養を重んじ、それが自然と行いにも表れて来る、と言った人柄だった。

劉少奇は執政数年来、身を常に謹み、他の3人の指導者たちと共に手を取りあって、新中国の発展だけを願ってきた。その陣営の中に、彼を背後からつけ狙うやからがいようとは、思いもよらなかったに違いない。

8月18日、天安門上より文化大革命の大軍を観閲した際、劉少奇は党内第2位から第7位にまで降格され、かわって林彪が党内第2位の身分を以って台上中央に立った。劉少奇には聶元梓の壁新聞が、あのバリ・コミュン宣言より偉いなどとはとても理解出来なかったし、また彼の党性や修養は、決して他と事を構えるような性格のものでもなかった。彼は来る日も来る日も悩み続け、そして或る日、そのまま何の手続きを経ることもなく、国家主席の職を停められ、軟禁状態に置かれてしまった。地方の官庁、党機関が麻痺状態に陥った頃、ある朝彼はようやく妻にこう言った。

「よく考えてみたんだが、今度の騒ぎは林彪と江青が仕組んだ反革命クーデターのようなだ」

劉少奇は妻の王光美との間に1男3女をもうけており、長男を源源、長女が平平、次女を亭亭、そして三女を小小と言った。両親の劉少奇夫妻が自宅に軟禁された時から、子供たちの苦難の日々

も始まった。

長女の平平は、その頃師範大学附属高校の1年生だったが、街に「打倒劉少奇」のスローガンが叫ばれるようになると、彼女もまた毎日学校で査問にかけられた。この日の午後、平平は全校の教員、学生を集めた劉少奇反動路線批判集会の席上、査問を受けるようにという通知を受け取った。この上、一体何を査問されればよいのか見当もつかない彼女は、過去何回かの査問の際に書いた作文にざっと目を通してまとめ上げ、それを持ち込んで読み上げた。まだ救いと言えたのは、造反派は別に彼女の発言内容に注意しているわけではなく、ただ皇帝の娘と言う偶像を闘争台の上に連れ出せば、それで足れりとしていたことであった。しかし平平はこの時、附属中学1年の妹、亭亭がやはりこの会場に連れ込まれ、台の下で彼女の査問を聞いていようとは、夢想だにしなかったのである。

平平が大会での査問を終えて下りて来ると、数人の紅衛兵が待ち構えており、彼女を事務室に連れ込んだ。事務室に入ると中には大学生と思しき3人が座っており、その中の少し太り気味の1人が彼女が入って来るなり、

「劉平平、お前、自分の家とはけじめをつけろよな」

と浴びせかけた。平平がうつむいたまま黙っていると、また続けて、

「お前にひとつ、名誉挽回のチャンスをやろうか。どうだい、やってみるか？」

と言う。平平はちょっと妙な感じがして、顔を上げてチラとその男に目をやったが、やはり返事はしなかった。が、その男の方では平平が申し出を黙認したと見てか、

「電話をかけて、お前の母親をここへ呼びなよ」などと言いだした。

これには平平も、

「周総理が、中南海から出しはしないわ」

と冷たく答えたのだが、相手はさらに冷たく言っ

た。

「車に轢かれたと言ったら、どうなる？」

「何をする気なの！」

「お前の母親は大罪人なんでね。清華大学の革命的教官、それに学友諸君が査問したいそうなんだ。これは毛主席の戦略決定によるものだからね」

にわかに彼らの意図をのみ込むと、平平は軽蔑し切って、吐き捨てるようにして言った。

「もし本当に毛主席の決定なんだったら、何で私を利用してお母さんを騙そうとするのよ」

ビシッ、と平平は張りとはばされてよろけ、相手の紅衛兵は怒りに震えながら言った。

「お前なんかいなくなつて、王光美はどうせ闘争台送りなんだ！」

言い終えるや、平平は別の小部屋に押し込められ、そのまま監禁されてしまった。平平は母の身に危険が迫っていることを知って焦ったが、その場を逃れることは不可能だった。

夜の帷が降り、北京市内の随所に設けられたラウドスピーカーもようやく沈黙した。ここ数日ぶりの静寂が戻ったわけであったが、王光美はかえって不安を募らせていた。子供たちも連日査問にかけられている。が、今日は夜になっても上と二番目の娘がまだ帰っておらず、また何事が起こったのかと心配でならないのだ。夫が軟禁状態に置かれてからというもの、周総理は自分に家から出ないようにと勧めている。それは一つには、夫、劉少奇の身をおもってのことだが、もう一つには、無論彼女自身が拉致されるのを防ぐためでもある。

そんな中であって、彼女は自分に二つの任務を課していた。一つには夫のためにつくすことで、何としてでも苦悶のどん底にある夫を慰め、精神の不均衡から夫の心を守らねばならなかった。もう一つには、子供たちをねぎらってやることであり、幼い心に焼き付こうとしている暗い影から、少しでも守ってやりたかったのである。彼女はいつも微笑を絶やさず、その苦労は外からはうかが

うことはできなかった。この時の彼女の焦慮は並大抵のものではなかったが、夫の劉少奇がやはり焦燥のあまり、廊下を往っては戻りしているのを見ると、夫もまた、子供が心配でならないのを見てとり、歩み寄って腕をとると、中南海の湖畔に散歩に誘った。

亭亭が頬に涙のあとを残して帰って来た。学校で捕えられ、ずっと査問されていたのだと言い、3日間家には帰っていなかった。乳母の趙お婆さんが、彼女のために食事の支度をしていると、突然電話のベルが鳴った。

源源が電話に出たが、受話器を耳に当てるなり顔色が変わった。亭亭があわただしく、「どうしたの？」と聞いた。

「姉さんが車に轢かれて、今、北京病院にいるそうなんだ」

亭亭は何日も総括されたため、随分と用心深くなっている。

「お父さんとお母さんには言っちゃだめ。先ずあたしたちが病院に行って、様子を見てからにしましょうよ」

二人が急いで病院に駆けつけると、病院の入口は紅衛兵であふれていた。源源と亭亭は門に駆け込んだ所で数人の紅衛兵に阻まれ、脇の方にある守衛室に連れて行かれた。中の主だった者が一人、源源に言った。

「すぐ君のお母さんに電話して、姉さんが危篤だからすぐ来るように、と言いなさい」

「姉さんはどこ？ 先に姉さんを見てからじゃなきゃ……」

「電話が先だ。危篤でなかったりしたら、君の母さんは来てくれないだろうからな」

しかし亭亭は動じなかった。

「電話をするのは姉さんに会ってからよ」

相手はだんだんと焦り始め、ついに本音を吐いた。

「劉少奇も王光美も、反革命分子だ！ お前た

ち、おやじ、おふくろと同じようになるなよ……」

聞き終わらぬうちに源源も亭亭も号泣しだし、見ていた紅衛兵どもは、仕方なく自分たちで電話に手を伸ばした。

この時王光美は、夫、劉少奇の手をとって家に戻ったところで、趙おばさんから亭亭が1度家に帰って、それからまた源源と飛び出して行ったと聞き、またも胸さわぎを感じているところへ電話のベルが鳴った。彼女が電話をとると、低い声が流れてきた。

「お尋ねしますが、劉平平さんのお宅でしょうか……。実は、お嬢さんが学校を出た所で車にはねられまして、今、北京病院に収容されています。ただちに足の切断手術をする必要があるので、保護者の方にすぐ来て頂きたいんですが。弟さんと妹さんも来ておられますよ……」

続いて「お母さん……」という亭亭の泣き声が聞こえると、後は何も聞こえぬまま電話は切れた。

しばらくの間、王光美は電話の傍に立ちつくし、一言も声が出なかった。劉少奇がそっと彼女の肩に手をやり、優しく言った。

「あわてることはないよ。とにかく、病院に行こうじゃないか」

王光美は夫に寄り掛かると、声をあげてひとしきり泣き、深く息を吸い込むと言った。

「総理が私に中南海から出ないようにって。何か起こるといけないから」

劉少奇は少し気持があせった。

「君が行けないなら、私が行こう。あんな小さな子が、私のために査問までされているんだ。行ってやらんわけにはいかないだろう」

結局、劉少奇夫妻は一緒に車で病院に駆けつけた。二人が病院の扉を推し開けた時、ホールで待ち伏せていた造反派は、劉少奇の名望と尊厳に皆怯んだ。まさか劉少奇自らやって来るとは思わなかったのだ。ちょうどその時、源源と亭亭が泣きじゃくりながら駆け寄って来た。

源源が泣きながら訴えた。

「お母さん。奴ら、お母さんを捕まえに来たんだよ」

王光美はこの時すべてを悟ると、怒りに身を震わせながら、傍の紅衛兵に言った。

「あなた方は何でこんな手段を使ってまで、私を騙そうとしたの？」

その造反派は我が意を得たりとばかり、こう言い放った。

「これは、江青同志の支持を取りつけた上でのことです」

数人の紅衛兵が、すでに王光美の退路に立ち塞がっていた。

劉少奇は終始一言も発せず、ただ憤然と造反派の所行をじっと見つめていた。王光美は夫がまだ何もされていないのを見ると、造反派はまだ夫には手を伸ばすつもりのないことを知ってちょっと安心し、人垣の後ろから夫に向かって叫んだ。

「私は大丈夫です。子供を連れて先に帰って下さい」

劉少奇は妻の瞳を祈るように見つめると、深く頷き、二人の子供を連れて身を翻した。

王光美が捕えられた頃、平平は家に帰り着いていた。趙おばさんから、父と母が自分に会いに病院へ行ったと聞かされると、騙されたと知って急いで門まで走り、父の帰りを待った。そして戻って来た父の車の中に、母の姿のないのを知った時、平平はあふれる涙を止めることができなかった。

「平平、足は大丈夫か？」

「私の足は何ともないわ。お母さんを騙して連れ出すために、連中が作った話なのよ」

劉少奇は話を聞き終えると娘を抱きしめ、悲しみ、憤りながら、冷たい夜空を見上げたのだった。

この卑劣極まりない一連の行動は、すべて蒯大富の手によるものだった。午後からずっと、彼と董申は電話のそばに陣取って、行動の指揮をとっていた。真夜中にさしかかろうとした頃電話が鳴

り、王光美を虜にしたことを伝えて来ると、蒯大富は狂わんばかりに大喜びし、董申に向かって言った。

「すぐに中央文革小組に連絡をとって、明朝9時から王光美の批判集会を開催すると、伝えて下さい」

董申も笑う。

「蒯司令は全く策士ですな。私がもし、西側で記者をしていてこのニュースをスクープすれば、間違いなく百万長者になれたでしょう」

これ正に、

忠臣自ラ忠臣ノ節有り、

奸佞懐ニ奸佞ノ心ヲ存ス。

の言葉通りである。王光美の運命が如何にあいなくてゆくかご存知になりたいくば、次回をご覧頂きたい。

(43頁からつづく)

典》編写組 上海人民出版社 1977 2冊

(2733p) 27cm

中医大辞典 基礎理論分冊(試用本) 《中医大辞典》編輯委員会編 人民衛生出版社 1982

355p 26cm

中医大辞典 婦科兒科分冊(試用本)

同 上 1981 221p 26cm

中医大辞典 中藥分冊(試用本)

同 上 1983 612p 26cm

中医大辞典 方劑分冊(試用本)

同 上 1982 612p 26cm

中医名詞辞典 香港 太平書局 1964 204p

18cm

中医名詞術語詞典 中医研究所他合編 香港 商務印書館 1975 585p 20cm

1985年12月現在

以 上

(49頁からつづく)

すると、大変喜ばれ、最近寮やアジア文化会館にも中国大陆からの留学生・研修生が生活するようになったこと、この留学生にたいする日本政府や企業の対応に、多くの問題があることを語られた。

劉さんが格別先生を尊敬している理由の一つは、彼女が「中華民国」を拒否して、台湾への強制送還の危機に見舞われたさいの、先生の首尾一貫した姿勢と支援にあったと思われる。だがそれだけではなくて、先生が中国侵略の歴史をしかと踏

まえて、最も原則的・道義的立場に立って、日中関係上の具体的問題に対処しておられることを、劉さんが鋭く見抜いていたからだろう。

本書は、今日の日本において、とめどもなく風化しつつけている日本とアジア、日本と中国のあるべき関係の原点を、孤高のヒューマニスト、ナショナリストの身を持するに厳なる生涯の軌跡そのものをつうじて提示した、まさしく「警世の書」である。

(1983年7月刊, A5判, 517頁, 非売品)